鹿児島カトリック教区報

〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099（226）5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行　教区広報部
1部60円年間〒共1100円

道標

洗礼の恵みに気づき、それを生きよう⑩

2024年　年間目標

鹿児島教区司教　中野　裕明

教区の皆さま、お元気でしょうか。

今回は「世界宣教の日」（10月20日）に因み、「対話を通しての宣教」についてお話しします。

さて、カトリック教会の姿を大きく変容させた第2バチカン公会議が閉幕してから来年で満60年になります。現在の教会の姿が当たり前と考えている人にとって、公会議以前と何がどう変化したのかについて知ることは、未来へのビジョンを持つために有益なことです。

その変化の一つは、カトリック教会の社会に対する姿勢が「対決」から「対話」へと転換したことです。福音宣教の視点からこの転換をお話ししますと、以前は、カトリック教会は「完全社会」であるとの認識から、社会の風潮に対抗あるいは対決していました。しかし現在は、この世にありながら、この世の中に「神の国」（神による統治）を成就させるために、復活したイエスは弟子たちを全世界に派遣したという理解に変わりました。（マルコ16・15参照）

したがって、「神の国はここにあるよ」と、まだキリストを知らない人々に知らしめることが、地域に散在している教会の存在理由であると説明します。

316年前の10月11日、屋久島の恋泊集落にイタリア人宣教師ジョバンニ・バチスタ・シドティ神父が単身上陸しました。来島の目的は、日本国の皇帝（徳川将軍）に会って禁教令の解除を要請するためでした。

承知のように、徳川幕府は鎖国政策をとっており、海外からの侵入者に対しては、密航者として捕縛していました。一方、長崎の出島ではオランダとの交易を続けていました。つまり鎖国政策とは、思想的に日本国の統一を錯乱させようとする外国勢力から日本を守るためのものであったのではないかとも言えます。

シドティ神父は日本への密航は日本の国是に反することであり、それを犯すと処罰されることになることを十分承知の上で日本の地を踏みました。当然ながら彼は捕らえられ、囚人とされ、長崎の奉行所で尋問を受けました。

ところで、1708年の日本ではキリシタンはほぼ壊滅状態でした。海外から潜入した宣教師は全員捕えられ、江戸にある切支丹屋敷に収容されていました。そこでは棄教が強いられ、それを拒むと処刑、棄教すれば日本名を与えられ生きながらえることができました。

長崎での尋問を終えたシドティ神父は、彼の願望が叶い、34年前から空席になっていた江戸の切支丹屋敷で、新井白石の尋問を受けることになります。

新井白石は、幕府の命を受け、シドティ神父を尋問します。

彼は当代随一の儒学者で、知性の固まりとも言える人材でした。尋問は西洋の地理、政治、文化、科学、言語など多岐にわたり、そこから得た知見は、後に『西洋紀聞』と『采覧異言』として出版され、日本の近代化への布石となったと高く評価されています。

ところで、カトリック信者である私たちが、シドティ神父と新井白石との対話において注目すべき点は以下の通りです。

①両者とも個人というよりも、一国を代表する立場の人であること。

新井白石は、徳川将軍が最も信頼を置いている儒学者であり政治家でした。一方、シドティ神父も、ローマ教皇庁では、教皇、枢機卿に次ぐ、聴取官という3番目の身分であり、ローマ教皇庁の使節であることを主張していました。

つまり現在の国の制度に当てはめると、2人の会談のレベルは日本国、内閣総理大臣と駐日バチカン大使級の対話であるとも言えます。お互いに礼をわきまえ、敬意を払った紳士的な対話でした。

②地理、政治、科学などのいわゆる知性にわたる分野では、共通理解ができたが、キリスト教の教義については、新井白石はまったく受け入れなかったこと。

つまり、対話は不可能でした。

③人間的、あるいは心情の面で興味深い対話がなされたこと。

新井白石は問いかけます。

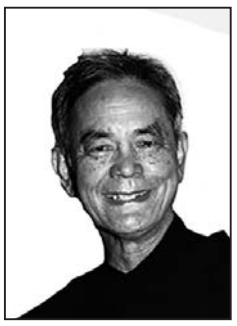
「男子（あなた）がローマ教皇庁の命を受けて非常に遠い道のりを超えて行かなければならないとき、身の危険など顧みずに行動しなければならないことは言うまでもないことだ。しかし、お前の母はすでに年老い、兄ももはや血気盛んな年ごろを過ぎてしまったはずである。そのような母や兄をどのような気持ちで思い出しているのか」

これに対し、シドッティ神父は次のように返答しています。

「はじめ、国の推挙によって、教皇の命令を受けてからは、どのような困難に遭おうともそれを乗り越えて、我が身をこの日本に到着させたいと思うほか、なにも考えることができず、年老いた母も兄も私がこの日本への宣教を命じられたことを、信仰のため、カトリック教会のため、これにまさる幸せはないと喜び合ったものでした。しかし、私の体は残らずみんな、父母、兄弟と血の繋がっていないところはありません。私の生命が生き続ける限り、どうして、父母や兄弟のことを忘れることができましょうか。」

316年前と国情はずいぶん変わり、信教の自由を謳歌している私たちですが、日本で福音宣教を実行する困難さは変わっていません。ただ、2人の人格者の誠意に満ちた対話は、私たちの模範になるのではないでしょうか。

喜界島出身のコンベンツアル会司祭
ペトロ瀧　憲志神父が帰天



喜界島出身で、30年余り奄美大島での宣教司牧のために奔走したコンベンツアル聖フランシスコ修道会のペトロ瀧憲志神父が9月3日（火）午後11時45分、老衰のため入所先の聖フランシスコ園（諫早市）で帰天した。98歳だった。

1931年5月26日に喜界島に生まれた神父は、成人してから聖心教会で受洗、その後1958年に有期誓願、1961年に終生誓願を宣立している。司祭に叙階されたのは1965年3月27日（於・大熊教会）のことで、それから同修道会の奄美修道院に籍を置き、大笠利、聖心、瀬留、古田町などの教会で宣教に尽力し、1997年から数年間はアシジに赴き、その後、再び奄美大島で働いた。奄美大島を離れたのは2009年のことで、2017年からは聖フランシスコ園に入所していたが、そこからもSNSを利用するなどして宣教を続けていたという。

優しい笑顔が印象的だった瀧神父の通夜は9月6日（金）、葬儀ミサと告別式は翌7日（土）、いずれもカトリック本河内教会で谷崎新一郎神父（コンベンツアル聖フランシスコ会日本管区長）の主司式でしめやかに執り行われた。

福岡で教区担当者の集い
子どもと女性の権利擁護のためのデスク

7月27日（土）、カトリック中央協議会子どもと女性の権利擁護のためのデスク（担当司教森山信三大分教区司教）主催の「長崎教会管区教区担当者の集い」が、大名町教会（福岡市）で行われ、鹿児島教区からシスター澤ヤエ子（レデンプトール宣教修道女会）と末吉卓也神父（姶良教会）が参加した（出席者合計18人）。

午前中、各教区の現状と課題の報告、性虐待に対するバチカンと日本のカトリック教会の対応の振り返り、グループ別での意見交換、今後に向けての話し合いが行われた。

午後は研修として、幼い頃性虐待を受け、解離性同一性障害を抱えて生きる女性を主人公にした映画「Teamその子」と、同映画監督と監修者2人による対談の視聴を通して性虐待被害者の現実について理解を深めた。

教区評議会

「シノドス・霊における会話について」

日　時：10月13日（日）16時～14日（月）13時
講　師：小西広志神父（フランシスコ会・シノドス特別チーム）
場　所：カテドラル及び教区本部
出　席：小教区と修道院の代表者
※講話後グループごとに霊における会話の実践と発表。

「赦すこと」

（修道女連盟研修会での講話）

教区修道女連盟顧問司祭　小隈　憲士

6月の教区修道女連盟への小隈神父の講話「赦すこと」を2回にわたって掲載する。激化するウクライナでの、そしてガザでの紛争をキリスト者としての目で見つめ、赦すために必要なことを考えてもらえたらと思う。

導　入

私が、この四旬節中に黙想し、今だに拘り続けていること、「赦すこと」のなんと難しいことかを今日は皆さんと分かち合いたいと思います。

今年（2024年）の四旬節の教皇メッセージのテーマは「荒野を通り、神はわたしたちを解放へと導かれる」でした。

皆さんもご存知の通り、イスラエルの民、ユダヤ人にとってエジプトでのファラオの圧政の下、奴隷状態から救い出し、解放して下さった神は、イスラエル民族の基礎となるアイデンティティです。そのため、それを記念し祝う「過越祭」はイスラエルの民にとって、子々孫々に伝える最も大切な祭り、民族の誇りです。それでは、神はイスラエルの民だけのものでしょうか。つまり、他の民族などは軽視してイスラエルの民だけを依怙贔屓なさる神でしょうか。もちろん、決してそうではありません。神はすべての人々、キリスト教徒であろうが、イスラム教徒であろうが、仏教徒であろうが、ユダヤ教徒であろうが、無神論者であろうとも、彼女、彼ら、いのちあるすべてのものの救いを望まれ、それは人間となられた神、イエス・キリストによって成し遂げられました。

さて、神はかつてモーセに語られました。「わたしはエジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から広々とした土地、乳と蜜の流れる土地へ彼らを導き上る」（出エジプト記3章7～8節）と。とても有名な出エジプト記の箇所ですからご存知と思います。これによって分かることは、神は私たちの置かれている現状をしっかりと見、そして何よりも生の声（叫び）を聞いておられるお方だ、ということです。

私たちが生きる場で発する生の声（叫び）に心を動かされ、何かをせずにはおられないお方です。それこそ、腸がちぎれるほどの痛みをもって、私たちを受け止めて下さるお方です。これが愛そのものの神であり、その神を私たちは信じています。そのことをイエス・キリストは良い知らせ（福音）として教えてくれましたこと。

「その時、イエスは仰せになった。『父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのか分からないのです』」（ルカ福音書23章34節）。

これは、十字架にかけられたイエスが最後に父なる神に向かって言われたことばです。「彼らは自分が何をしているのか分からないのです」ということばにロシアやイスラエルの独裁的指導者に対する私自身の「赦せないこころ」が大きく揺さ振られました。

特に今年に入ってガザの状況がとても深刻になってきて（3万数千人の犠牲者がいて、7割近くが子供と女性であること。半数は子供たちであることなど）を知るにつれ、イスラエル軍の行動はパレスチナ人を「尊厳ある同じ人間」とは思わない、彼女ら、彼らが愛する人々と共に生きる場（社会）を完全に破壊し、そのいのちを奪い、この世界から抹消する悪魔的な政策「民族浄化」であると私は思い、こころを強く痛めています。

「父よ、彼らをお赦し下さい」と十字架上のエイエスは言われます。ご自分を殺す人々をも赦す、この徹底した無償の「愛」に私のこころは強く動かされました。ですから、「赦すこと」、その恵みを願い今も祈り続けています。それでもなかなかロシアやイスラエルの政治家や軍人たちを「赦すこと」ができない私です。「赦すこと」のできないことが、これほどまでに苦しいことなのかを身を以て体験しています。

2　私たちは不条理な出来事や無辜の民が殺されることにほとても耐えられません。そのために神を信じ生きていても、「神はどこにおられるのか」「全能で、愛そのものの神はなぜこのようなことを赦されるのか」と神の不在を問いただします。

しかし神はどのような時にも、何が起きようとも、そこに共にいて下さるお方です。イスラエル軍の爆撃で瓦礫となった建物の下敷きとなり、死んでしまった子供の傍らに、またウクライナのブチャでロシア軍に虐殺された人たちの傍らにも主イエスはいて下さり、彼らが人生の旅路を終えるのを見守ってくださった、と私は信じます。主イエスの御手の中で、彼女ら、彼らはその人生を終えた、と思います。ですから、この悲しい出来事の最中に「神がどこにおられたのか」とは問いません。

キリスト者は神の人間に対する無償の愛、そして赦しを信じています。「赦せない」私はガザの子供たちのことで、魂の痛み、嘆き、怒り、深い悲しみにより、「赦されている人間であり、赦す恵みを受けている人間である」ことを信じる霊的な目は曇ってしまい、信仰の試練を受けているなあ、と正直に思います。

3　イエス・キリストが弟子たちに教えた祈り、キリスト者にとって最も大切な祈り、そう「主の祈り」は人とのかかわりの中で日々の赦しを実践することがいかに重要であるかを教えています。赦しは、私たちの日々の生活の中で実践されなければなりません。日ごとの糧なしには生きられないのと同じように、私たちは互いに赦し、赦されることなしには隣人、そして神との親しい交わりを生きることはできません。ですから赦しはイエスの教え（福音）の中心にあるのです。

「主の祈り」で赦しにかかわるところを少し補足して説明します。共観福音書の中でマタイとルカに「主の祈り」の記述があります。マタイ福音書6章12節に「わたしたちの負い目をお赦しください。同じようにわたしたちに負い目のある人をわたしたちも赦します」とエイエス。そしてルカ福音書11章4節では「わたしたちの罪をお赦しください。わたしたちに負い目のある人をみな、わたしたちも赦します」とあります。「わたしたちの負い目をお赦しください」と神にその赦しを願っていることを文字通りに受け取りますと、次のように考えられます。

神が私たちの文字通りの負債を赦して下さるということは、私たちが神に対して文字通りの負債を負っていることに他なりません。それでは一体、文字通りの負債とは何なのでしょうか。つまり、私たちは神に対して、一体何を文字通り負っているのでしょうか。そこで私たちが「神の似姿である」ことに私は注目しました。

創世記1章26節に「神は仰せになった。『われわれにかたどり、われわれに似せて人を造ろう。そして、人に、海の魚、空の鳥、家畜、野のすべての獣、地を這うすべてのものを治めさせよう』」とあります。従って、私たちは神の似姿として造られた存在であり、神から、いわば管理者に任命されているわけです。もっと言えば、神が創造された天地万物（被造物）、この世界を神とのかかわりの中で、共に働き、神のみ旨に沿うよう管理が任されているのです。

聖パウロはローマの信徒への手紙の中で、私たちは「神の相続人。しかも、キリストと共同の相続人です。」（ローマの人々への手紙8章17節）と言っています。続けて、「被造物は神の子らが現れるのを、切なる思いで待ち焦がれているのです。被造物は虚無に服従させられていますが、それは自分の意志によらず、そうさせた方のみ旨によるのであり、同時に希望も与えられています。すなわち、その被造物もやがて腐敗への奴隷から自由にされて、神の子供の栄光の自由にあずかるのです。わたしたちは今もなお、被造物がみなともに呻き、ともに産みの苦しみを味わっていることを知っています。」（ローマの人々への手紙8章19～22節）と。

ところで所有者から管理を任されたら、誠実に管理の務め（仕事）を果たすのが管理者です。ですから神の似姿に造られ、被造物の管理を任せられているのですから、所有者、つまり創造主である神のみ旨（その望み）通りに、その期待に応えなければなりません。神によって創造されたこの世界のあらゆるところに細かな配慮をすることが、私たちが負っている負債と言えます。

神のみ旨（望み）は、すべてのいのちを生かすことです。すべてのいのちある存在がその「生」を全うできるようにすることです。なのに、その神の意を汲み取らず、神から託された使命（管理者としての務め）を誠実に果たさず、人間は神に対して返済できない負債を負っています。

自分達の幸せ（利益）のみを考えるエコイズムは肥大する一方で、気候が変動するほどに地球環境を破壊し続けています。また、様々な格差が生まれ、地球上の誰もが、そのいのちを全うできるように神は配慮して下さっているにもかかわらず、その格差は拡がる一方で1日2ドル以下で生活せざるをえない人々の数は世界人口（約80億）の4分の1はいます。ごく僅かな超富裕層は世界の富の多くを独占しています。また一部の独裁的指導者が惹き起こす戦争によって、女性や子供たちなど弱い立場にある人が犠牲となっています。

互いに和解し、赦し合うことはせずに、ほとんどの人間が神から託されたその使命（すべての被造物のいのちを生かすこと）を忘れています。私たちが神の赦しを必要とするのは、「赦すこと」のできない私たちだからです。もちろん神は条件を付けて私たちを赦すお方ではありません。つまり神は、私たちのこの罪、あの罪と区別して赦すかどうか判断なさることは決してありません。たとえ、私たちが互いに赦すことができない、「赦し」の欠如があったとしても、神はどこまでも赦してくださるお方なのです。また聖パウロはコリントの信徒たちに、「神こそ、キリストにおいてこの世を和解させ、人々に罪の責任を問うことなく、和解のことばをわたしたちにお委ねになったのです」（コリントの人々への第2の手紙5章19節）と語っています。そう、キリスト者は赦しと和解の福音を告げ知らせなければなりません。

そして謙遜にその赦しを絶え間なく受け取り、また、与えなければ私たちの魂は死んでしまいます。赦されるということは賜物として与えられた新しい生き方を尊び、互いに「共に生きている」かけがえのない大切な人という意識を保ち続けることです。これなしには、私たちは神の民として「共に旅する」ことはできません。**（続く）**

観想修道会のホスチア作りを見学

玉里教会学校の子供たち

8月24日（土）玉里教会学校でデイキャンプを行いました。8人の子供たちが参加し、引率役の大人も8人と、計16人となりました。今回の目的は 溝辺町の聖血礼拝修道会聖ヨゼフ修道院を訪問し、「ホスチアがどのようにして作られているのか?」を見学させて頂くことでした。

まずは、途中にある国分教会を訪問しました。

教会では、かつて玉里教会の主任司祭でもあったサンタマリア神父様が大変喜んで迎えてくれました。そして神父様ご出身のシチリア島の話をして下さったほか、ご聖体の話をして下さいましたので、今からホスチア作りを見学するのに、ちょうど良い導入となりました。

そしていよいよ聖血礼拝修道会へ。そこでは普段は入ることのできない聖なる場所に案内して頂きました。作業場ではベトナムから来られたという若いシスター方5人が、ホスチアを作っている最中でした。

扇風機だけの小さな部屋での作業、今の時期は暑さのためにホスチアの生地を焼く際に、生地が割れることが多いそうで、見学中も度々割れていました。子供たちは 割れたホスチアの生地を食べさせてもらい、「日曜日に頂くご聖体とは 味が違う」と喜んでいる様子でした。

国分教会で

作業見学の後はシスター方と歓談の時を過ごしました。ベトナムのシスター方はとても明るく常に笑いが絶えず、子供たちとの楽しい時間を過ごされていました。帰る際には「また来年!」と再会の約束をして帰路につきました。

道すがら「来年はベトナム語で話せるように勉強してこよう!」という言葉も聞かれました。そして教会に戻ってからは、さっそくシスター方にお手紙を書きました。

「ホスチアを作るまでに割れてしまったり大変なことを知りました」「部屋に飾られていた手作りのものを見てすごいなぁと思いました」「また会いに行きたいです」…などなど。また中にはアプリで調べて、ベトナム語で挨拶を書いている子供もいました。

今回の経験を通して、子供たちはご聖体拝領の度にシスター方のご苦労に心を馳せ、イエス様とシスター方に感謝の思いを抱きながらご聖体を頂くことでしょう。（外山映子）

イグナチオの霊操⑯

紫原教会主任司祭　貴島丈弥

第二週　「三組の人」

「二つの旗」の黙想によってキリストの旗を選び、受けいれられるよう願った霊操者は、キリストへ向かうよう、また留まるように意志が動いています。この意志の決意を具体的な三様の人物と照らし合わせ、自分がどの段階なのか、どの段階へ進むべきなのかを検討するのが「三組の人」の黙想です。

「正しい道を取るには、理性の認識と、それに自由に従う意志力が必要」であり、キリストに完全に従うための意志の力を育むための黙想とも言えます。

第一組の人々は、平和のうちに主なる神を見出し、救いが得られるために、手に入れたものへの執着を取り除きたいとは思うものの、臨終の時まで何の処置も講じない。（霊操153）

第二組の人々は、執着は取り除きたいが、手に入れたものを手放さないまま執着だけを取り除きたい。従って、自分の欲する方へ神を来させ、たとえそのものを手放すのが自分に一番望ましい身分だとしても、神の方へ行くためにそれを手放す決定まではしない。（霊操154）

第三組の人々は、執着を取り除きたいが、手に入れたものを保つか保たないかということに対しても、偏らないように心を持ってその執着を取り除きたい。望むことはただ一つ、われらの主なる神が彼の心に置かれているところに応じて、また、主なる神への奉仕と賛美のためにその人によってよりよいと思われるところに従って、手に入れたものを持ちたいか持ちたくないか、そのいずれかを望むことである。そして、さしあたって、気持ちの上で、すべてを手放したつもりになり、主なる神へのたんなる奉仕のためでなければ、そのものを他のものも是非とも望まないことにする。従って、主なる神によりよく仕えることができるという望みだけが何かを受けさせ、または手放させる動機となる。（霊操155）

「二つの旗」の黙想が理性的な悟りを目的としているのに対し「三組の人」では意志することが目的となっています。イエスのもとに留まり、聖なる人になるという理想を、日常現実生活の中で具体的に決定していこうと意志する自分になることができるかをイグナチオは試しています。

第一組の人は、神を見出し、何を手放すべきかを理解し、そう願いますが、その思いは漠然としていて無気力なものなので、具体的には何もしない人です。

第二組は、第一組の人よりは積極的に見えますが何も手放せず、犠牲を払わず、自分の傷つかない選択をし、神にさえ触れることを許さないものに執着している人です。

第三組の人は、完全な不偏心を持っている人です。第三組へ入りたいと願いながら、そうできずに、物や財産への執着ではありませんが、第二組をさまよっている自分がいます。

参考文献

ペドロ・アルペ、キリストの道　第四巻　第二週
生活の改善

+KABAYAN SEKSIYON+

Kahalagahan ng Biblia sa Pagdiriwang ng Liturhiya

Sa Biblia nagmumula ang kahulugan ng mga kilos at signo sa liturhiya (VD 52; SC 24). Si Kristo mismo ay buhay sa salita. Siya ang nagsasalita kapag binabasa ang Biblia sa Simbahan (VD 52; SC 7).

Kung gayon, kailangang bigyang halaga at maranasan ang tunay na kahulugan at kahalagahan ng kilos sa liturhiya upang maunawaan ang salita ng Diyos (VD 52).

Iminumungkahi ng pumanaw na + Santo Papa na ang mga pastol ng Simbahan at lahat ng mga naglilingkod dito ay siguraduhing lahat ng mga mananampalataya ay matutong pagnilayan ang malalim na kahulugan ng salita ng Diyos na ipinapahayag taun-taon sa liturhiya [sa natatanging paraan, sa pamamagitan ng pagsunod sa ritmo ng taong liturhiko],na nagpapahayag ng mahahalagang misteryo ng ating pananampalataya (VD 52).

Kung nauunawaan ng mga mananampalatay ang mga salita ng Diyos na ipinapahayag sa pamamagitan ng liturhiya, ito`y nagiging laman sa puso ng tao at nagiging buhay. Mas nagiging kalakasan ng bawat mananampalataya ang salita ng Diyos, na walang iba kundi si Kristo.

Kaya kung ang salita ng Diyos na ipinapahayag sa liturhiya ang nagiging kalasag ng mga mananampalataya, ito`y nagbibigay ng lakas at ginabayan ang bawat isa na makiisa kay Kristo na siyang pinang-gagalingan ng lakas ng bawat nanampalataya sa kanya.

Katesismo Tungkol sa Liturhiya (Fr.Dino Orolfo)

会と催し　10月

2日（水）みことばを祈る集い・ザビエル教会・10時
4日（金）サンタマリア神父叙階記念（1970年）
▼朴昶奎神父霊名（聖フランシスコ）
5日（土）アッシャー神父命日（2021年）
▼デルクス神父命日（1980年）
6日（日）年間第27主日
7日（月）聖血礼拝会終生誓願式・聖ヨゼフ修道院・10時
8日（火）中野裕明司教・司教叙階記念（2018年）
▼大松正弘神父命日（2018年）
9日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
10日（木）福崎英雄神父叙階記念（1989年）
12日（土）聖書の分かち合い・教区本部・14時
13日（日）年間第28主日
▼教区評議会（カテドラル及び教区本部）・～14日
16日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
18日（金）聖ルカ福音記者
▼内野洋平神父霊名（聖ルカ）
▼池上利男助祭霊名（聖ルカ）
20日（日）年間第29主日
▼世界宣教の日（献金）
▼第7回集会祭儀司会者養成講座（鹿児島地区）・教区本部・15時
▼レジオマリエ鹿児島・谷山教会・13時30分
21日（月）西田正神父命日（2021年）
24日（木）大水如安神父命日（1994年）
26日（土）聖書の分かち合い・教区本部・14時
27日（日）年間第30主日
▼ザビエル教会堅信式・9時
28日（月）聖シモン　聖ユダ使徒
30日（水）中野アカデミー・教区本部・13時30分
31日（木）ミタマヤ神父命日（1984年）
▼キッペス神父命日（2021年）

【司教日程】 2～3日常任司教委員会（東京）、7日聖血礼拝会終生誓願式、9日中野アカデミー、10～11日カトリック学校研修会、16日中野アカデミー、23～24日長崎教会管区会議、27日ザビエル教会、28日聖血礼拝会、30日中野アカデミー

祈りの意向

【祈祷の使徒会】
教　皇　　使命を担い合う
日本の教会　シノドス

ピラールの聖母宣教会司祭

石川直樹神父による黙想会

日　時：10月28日（月）、29日（火）
1日黙想で、2日とも10時～16時
場　所：名瀬聖心教会聖堂
内　容：賛美、講話、ミサ・聖体礼拝
参加費：ミサ献金
問　合：末吉神父携帯　090（5735）5769
名瀬聖心教会への問合わせはお控えください。

聖マリア学園研修会を終えて

カトリック吉野幼稚園 園長　野田弘之

夏休み恒例の聖マリア学園の夏季研修会が、今年は8月22日（木）にカトリック吉野幼稚園と吉野教会を会場にして開催されました。

聖マリア学園の4つの幼稚園の教職員約50人が一堂に集まって、中野司教様の講話やその後の分かち合いなどで研修を深めました。

今回の研修会のテーマは「カトリック幼稚園の職員として」でした。

中野司教様から「カトリック幼稚園で働く皆さんに今伝えたいこと」ということで、講話をしていただきました。カトリックの教えの根幹にある「愛」と、保育者としての子どもに接するときの心構えなど、それぞれの年齢や経験年数などを踏まえて、心に残るお話でした。

その後、6人ぐらいの小グループに分かれて、講話を聴いたのちの「分かち合い」をいたしました。

「分かち合い」の中では、講話を聴いての感想だけでなく、これまでの保育における経験や日常生活のこと、それぞれの生い立ちについてなど、初対面の人も多いグループ内での意見交換としては大変深まりがあり、またこれからの保育に生かせる示唆などもあった貴重な時間でした。

残暑厳しい中での開催となりましたが、参加された皆さんには大変実り多い研修会になったものと思います。

今のその気持ちを大切にして、行事の多い2学期を乗り切っていこうと決意することでした。中野司教様をはじめ企画運営された皆様、参加された皆様、いろいろとありがとうございました。

2人の入信式

鹿屋教会

8月25日（日）中野裕明司教様により、斉之平義見（ルカ）さんと釘田政弘（ヨセフ）さんが洗礼、堅信、初聖体の恵みを受けた。2人が「おめでとう」のシャワーを浴びているとき「今日は斉之平さんのお誕生日です」という声がして、聖堂は2度目の喜びに包まれた。そして「ハッピーバースデー」の合唱で締めくくり、入信式はめでたく終わった。

晴れやかな斉之平さんと釘田さんに2人の奥さんが幸せそうに、嬉しそうに寄り添っていた。

その後、司教様と斉之平さん、釘田さんを囲んでのパーティではささやかながらフィリピン、ベトナム、日本のバラエティに富んだ料理が並べられ、皆とても嬉しそうだった。こんな幸せな集いが世界中に溢れますように。（報告・鹿屋教会通信員）

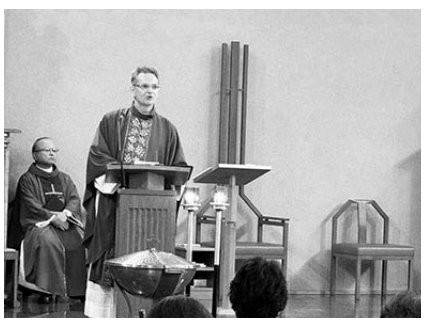
レナト神父が司祭叙階銀祝感謝ミサ

みことばの味わい方を解説

8月18日（日）、聖ザベリオ宣教会司祭で、現在も「みことばを祈る集い」（毎月第1火曜日10時からザビエル教会で開催）を通して鹿児島教区の信徒たちの指導に当たっているレナト・フィリピーニ神父（大濠カトリック会館）が、ザビエル教会で同教会主任の小隈憲士神父と感謝のミサをささげた。

1999年から鹿児島教区（鹿屋教会）で働いた経験があるレナト神父は、2年前に司祭叙階銀祝（25周年）を迎えていた。その際、「司牧経験のある鹿児島教区で司祭叙階銀祝の感謝のミサをささげたい」と希望していたらしいが、新型コロナウイルス蔓延のため計画を断念したのだという。そして今年になってコロナウイルス蔓延が落ち着いてきたため、この夏に、鹿屋教会やザビエル教会などでの感謝のミサを実現させた。

ミサ中説教したレナト神父は、み言葉を味わう秘訣について、沈黙の大切さや分かち合うことが相手へのプレゼントになることなどを熱心に説いた。



親子のひろば

要理

洗礼、堅信、聖体

入信の秘跡である洗礼、堅信、そして聖体の三つについて簡単にお話しします。まず洗礼についてです。

洗礼とは父と子と聖霊の御名によって原罪と自罪とその罰を赦し、神の恵みの命…神の子として生きる新しい命が与えられる秘跡です。

原罪とはアダムとエバが犯したものですが、罪を犯してしまいがちな人間の弱さそのもののことでもあります。自罪とは自分の意志で犯した罪のことを言います。洗礼の秘跡はすべての秘跡のはじまりです。この大切な秘跡は普通なら司教や司祭が授けますが、緊急の場合は誰でも授けることができます。

次に堅信についてです。堅信とは按手と聖香油をもって聖霊とその賜物を与え完全な信者となし、キリストの証人とする秘跡です。聖霊の賜物とは聖霊に導かれるままに従う超自然の性質のことであり、上智、聡明、賢慮、勇気、知識、孝愛、敬畏の七つあります。

堅信は教会共同体の一致という観点から普通は司教様が授けます。因みに昔は堅振と漢字で書かれました。これは聖霊によって体が揺らされるという理由からだったようです。

最後に聖体についてです。聖体とは目に見えるパンとぶどう酒がイエス様の御体と御血であるという秘跡です。この秘跡をイエス様は最後の晩餐の時にお定めになりました。イエス様のからだである御聖体とは信じる信じないにかかわらず「イエス様のからだです」。つまり信者にとってパンはイエス様の体であるけれども、一般の人にとってはただのパンということではありません。この信仰があるからこそカトリックの教会の中には御聖体が安置され、いつもランプが灯っているのです。

2024 シドッティ祭のご案内

場　所：屋久島教会（シドッティ記念館建設予定地）
日　付：11月23日（土）
時　間：9:30 ～ 14:30（イベント・交流会）
ミ　サ：15:00 ～（司式・中野裕明司教）

「なぜ日本に来たのか？」と新井白石に問われ、シドッティ神父は「日出ずる国を目指した」という意味の返答をしています。この言葉に表れるようにシドッティ神父は屋久島に上陸した時に明るい希望を見たのかもしれません。白石が彼を通じて「西洋記聞」を書いたことはシドッティ神父が閉塞的であった当時の鎖国日本に光を注ぎ込んだとも言えるでしょう。このことに思いを馳せ、シドッティ祭を通じて穏やかで楽しく、優しい気持ちに誘われるような一日を皆さんと一緒に過ごせたら幸いです。皆様のご参加をお待ちしています。

NPO法人やくしま未来工房
理事長 古居智子